

## 狩野孝信の風俗画について ―「北野社頭遊楽図屏風」(個人蔵)を中心に―

千種 佳奈 (神戸大学)

近年注目を集める狩野孝信「北野社頭遊楽図屏風」(個人蔵、以下本作)は、孝信の風俗画を考察する上で重要な作品だが、その史的位置付けは十分に検討されていない。本発表では、本作に代表される孝信工房による風俗画について、本作の特徴を検討した上で、モチーフの転用関係などの分析を通じてその展開を考察する。

まずは、本作を中心に孝信が制作した風俗画の様式を分析する。本作には顔貌表現にばらつきがあることや、孝信による他の風俗画と比べると細部表現が異なることから、複数の工房絵師の関与が認められる。本作の前景には人々の踊る様子や宴の様子など遊楽の場面が描かれるが、それぞれの人物は緊密な関係を持たず、まとまりは希薄である。このような特徴が生じた要因として、本作には同一場面と同じ姿態の人物が繰り返し描かれていることや、画面内容とは無関係の人物が描き加えられていることに注目する。それを踏まえ、「園城寺・日吉山王社図屏風」(文化庁)や「唐船・南蛮船図屏風」(九州国立博物館)などの孝信筆の風俗画4点と比較すると、孝信の風俗画には晩年になるにつれ工房絵師の関与が増えること、同じモチーフの反復が増加することがわかる。以上より、本発表で言及する孝信の風俗画の中で、本作が最後に制作された作品である可能性を提示する。

この点を踏まえ、次に、本作に見られる当世風俗の描写と人物の姿態のパターンについて考察する。制作当時の風俗を画中に描く当世的表現は、本作の際立つ特徴と言える。例えば、人々が着用する小袖には、慶長末期から元和初期頃の特徴である幾何学的な染分と非常に細かい柄で構成される文様が見出せる点、画中屏風に描かれた草花図は孝信の兄・狩野光信の様式に類似する点に着目する。これらの点から、本作が描かれた当時の限られた時期の北野社頭の情景を表している可能性を指摘する。ここで示した当世的表現は孝信の風俗画特有の展開であり、本作と人物のパターンを共有する「北野遊楽図屏風」(MOA 美術館)や「春秋遊楽図屏風」(個人蔵)など3点の作品にはそうした特徴が希薄であることを確認する。

上記の類似作品のように、本作に見られる人物のパターンと共通する作品が狩野派内外に多く見られることから、孝信工房で用いられていた人物のパターンは広く伝播したことが推測される。例えば、岩佐又兵衛の作品にもそれが見出される点に触れ、孝信による風俗画の狩野派外への影響にも考察を展開する。

以上の考察から、本作の風俗画としての位置付けを示し、晩年期の孝信の風俗画が同時代の絵師へ影響を与えたことに言及する。